さの木

七

哥と詞と名ゝる

[V. 10]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 10
copy 1
Asian
Japan
cage

2004551302

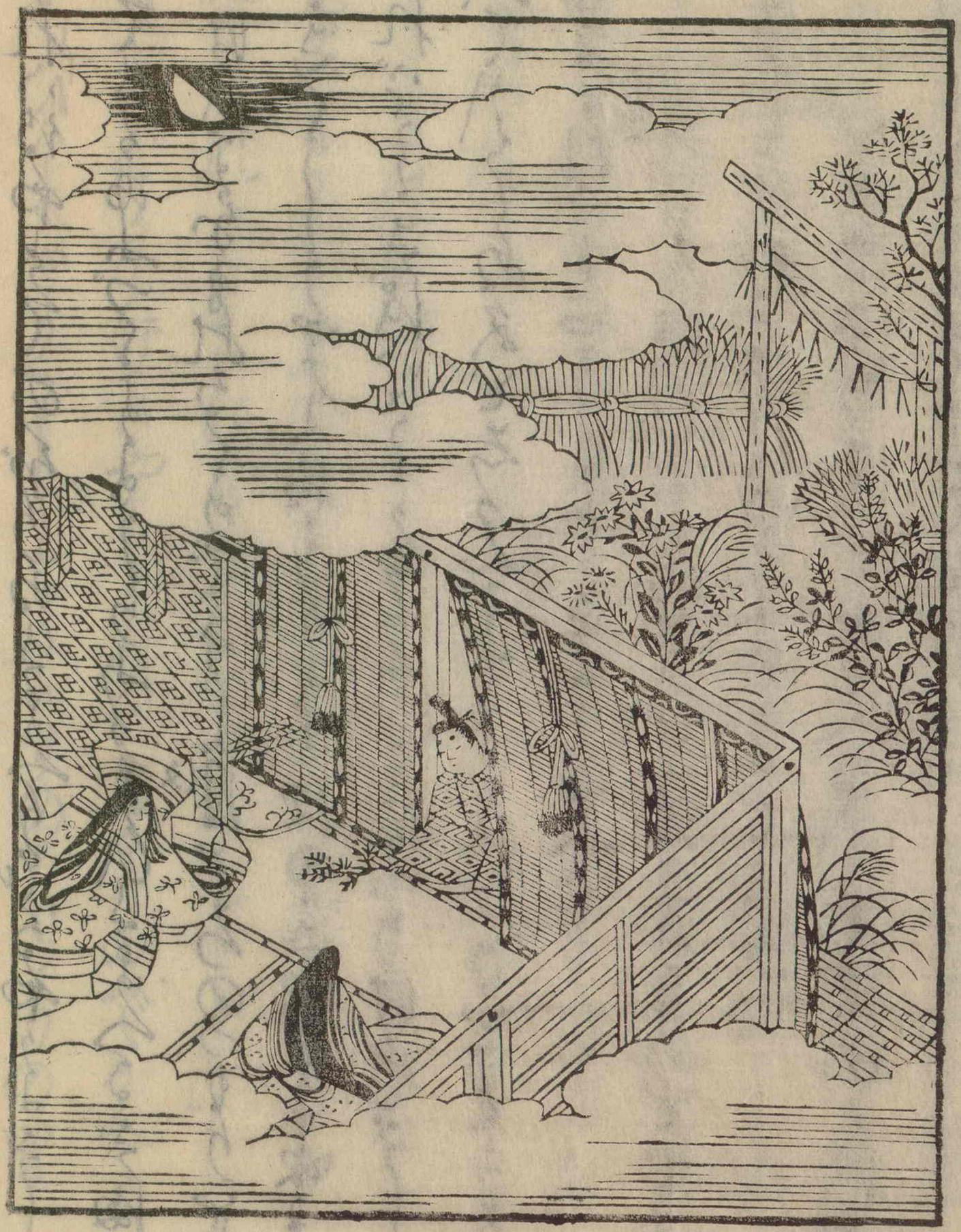
秋ごとのたもとぐちうちそめ
心ばそくおもほえむ（九息所）やとぞ
おぼしのたまへる　菱
ゆゑもうをのみ
とも（其の父そうする）やのうちまもりさ
めざめをそそのかしもてなされ
もてなしをうらなひ
なりうめとこうりそてら
をそてこそこちよいで
れいもよりなやましげなり
さ夜ふけてうち
とおぼしたる（ふん）ぞ

まはあらでれいなるさぶらひ
いとぐれ心のいと痴なるさまもひ
きて給なんまいとあしく
おぼしまうで給九月七日ころ
なれどむげよそおぼすなごころ
そそくされど深くうちとけびくれせうそ
こありそれば見ゆでやとて
とあるうむまれいこと深まごごろのふい
めんとひとそれどもそそくさ
の空をかいろ給ふりうそさ
れおとろへ

のぼる。松風もそぐ吹きて、それともなくもの哀れなるよき夜なり。
えんそうむいしょうそうさごそんしょくどうぶつ
ぞんとりくとそうさすごとうさつのびのび
れどこのひさうくるれようういふと先
でうくうくうく

(九息ヵ)

おぼ(涼行)てやうなものでありさうな
やうでおぼつかないものだうとおもふこと
またそこらあたりでいぶかしう思ふ事もあるが
ようすれと、まあやうやうそれの人ぐ(ん)げんいや
がることもいろ〳〵ちりづもせおよいとおもふ
どあのひとこもあれば(ん)いさやこの人めもとうぐ
るようすれおぼさんとおもつくづくいうで
みんがいまうつくしおぼすようとおもつ
またうれでたまらんようけうまてたまらん
れば(ん)どうぞおぼうでのろ
けりこいとおもうこと(涼)のゆう



（原）
（原心）
（墨）
（原心）

心ぐるしくおぼし（原刊）
給ふれもいりぬるそらをながめ
いづこともそこはかとおもひ（北）
るつゝさもこゝろぬべくやう〳〵（北）
くれのつまもさだまりて中〳〵心うごそ
ばしこぶう（ん）ぶ（ん）のひかりたゞうちつれ
て（ん）どろ〳〵夜のこずまもびようえん
そうりけぶりうあり（ん）風るりおもしろ
のうちにもさまざまにそゝぐ雨
どもまものびやんるをのり
気色ごとにうちなりぬ

曉(ほの)のうれしきをこそはよ

もろ人の秋のそら(ほ)ぞくもれてはらうへてやす

らひまへるふうたりうち風(ぜ)のよくひやる

かなるをさうしてもなりもろ

ぐみなるをさうしてもなりもろ

くともゆめよ

大(ほ)ろの秋のひ

へそのべの松虫ぞやこゑおほれどひ

なるれば明ゆくそらもりてもの

狂いとなくそよ(九息)ぬもえ心ぞそぞおあれそて

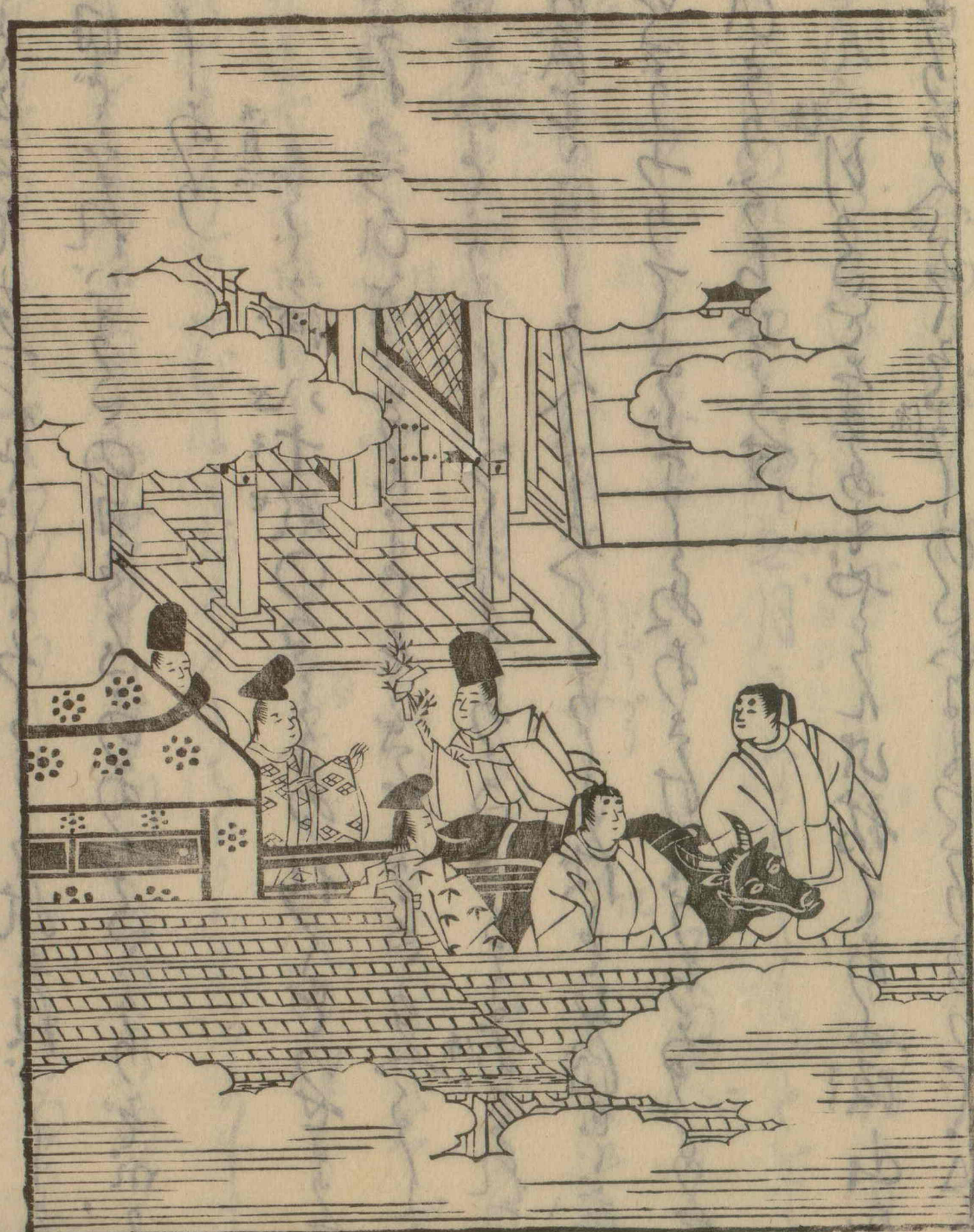
なぐめ給ふのこそてまつりのる月びのれうち
なほとまれるいなどいうさんへごとあま
出あてあやまちもいべくめで、さこも、地人ごん いくだうり
のこうまてうかうれおりき夜をこみすてこそいうれ
こそこんとくあいうくたなこぐぐこおこうれ(ほ)るまこうの
うりもこまやうるうハ、おほ(墨)ーなびくぐうりなれど、
まこうちへこそめうのべさこふくたすうねだ、
のとひうこ(地ほ)おとこハさーもおほあこふくをぐうり、
なきけのあよいうくひびけまべうめれだ、夜
こてまこなべての一ふ月きまのうさりこれ
たまびくてそむこんとすをにおう

もいつゝなうてやむべし。接(せ)のれさう
ぐくうそごめくれのれでうど
なごいくあうめうごこ陸まて。とうひ笑(さこ)
のくごいなれぐ。おはくくうこて
ろうさそのこなごまうさ月のお指
そいまそくめこんやうまぐちくおうまくる。
なさみつなごさのはけうされゆる不宣(ふぎう)ちり
つれいそでそちのうくこさまりゆくをうわくと
のこおぼーうり也(地)のへいれいたこくもごさも
衰るもさ陸ぐるこさめべし。何(なに)ど也(も)へるもごさ
なりくれめこほうやもひるり。せ也(や)めり出

めう人のれおそりはごろもさへなくちるん十
六日うつくしまへまいるそれの義式（ぎしき）は海さ
つそてらやうふそうしてぐさうめうんぐりめとも
やむごとなくおぼしあつかせたまふ院（ゐん）のれそ
ろそせもおれいまうでたまふべし大将殿（原）ゟり伊（惟）
のつきめことにもまさりけ海くもりてそら
なまへよとそゆふなつはのくたもとすゑ
やう（ほ）海もりくるけしき秋（秋）も心あはたゝあめ
れの中でとくれぬるまありめてらし
伯れいりいくさはがたなれどれん
つまありふのれまでまいてうせうう

やうもありなんとおぼえ侍る（歟之）
れけるひなれば東おもふ日なりさうの時
ようるまでうち給へるに
まつけてもらくおもふのそぐりさすらひ
おぼし心ざしていひさしてまうのぼりぬ
さ夜ふけてそ忘のこせうちさゝなも地のこ
ひさをぶおもれうもおぼさう（地）十六まで（歟汾）こよう
まうのぼりて供ふしてをこれてまうのぼりぬ供ふして
ぞふまうでゝのへをこ結ける
（以裏）その秋をなふぞ（上）
うちまもれぞうちまもれぞうち（地）秋立ない十四まで如なけ

せのなるる袖とゝめれどや



とゝろてのこれどゝ
ほどなれどまるこのあるこゝろぞゝ
ーあり

（六息ホ）
ふぐう河八十瀬（そせ）のるまめれくぞもまで
れゝこゝひとゝこゝやんこゝ
ゝたてゝよゝくゝふくゝ（添ん）おゝれゝろ
ひゝぶゝこゝうゝへゝまゝこゝばゝとゝひゝ（こゝり）翁
ゝこゝうゝありてゝごゝなゝ
ひゝとゝりごゝちおゝす
（添）りゝとゝなゝごゝめゝもゝやゝんゝひ私ゝあゝふ阪（さか）山を
ゝゝこゝろゝなゝべゝてゝそゝゝ（添）ゝこゝのゝこゝろゝりゝでゝひゝと

やつとなつみおさびしく拾地まつて

さびのそこゐいうるれ

けん院のれちやうや神ぢ月はたりてもいとをも

くおくくまもなく冷泉也中

月もちぶしてさうぐう院よりそれぞれ

まも雲うえのれこととみて

ぢおのれくに院行つも也

なるごともれうろ

代をまうごむよも

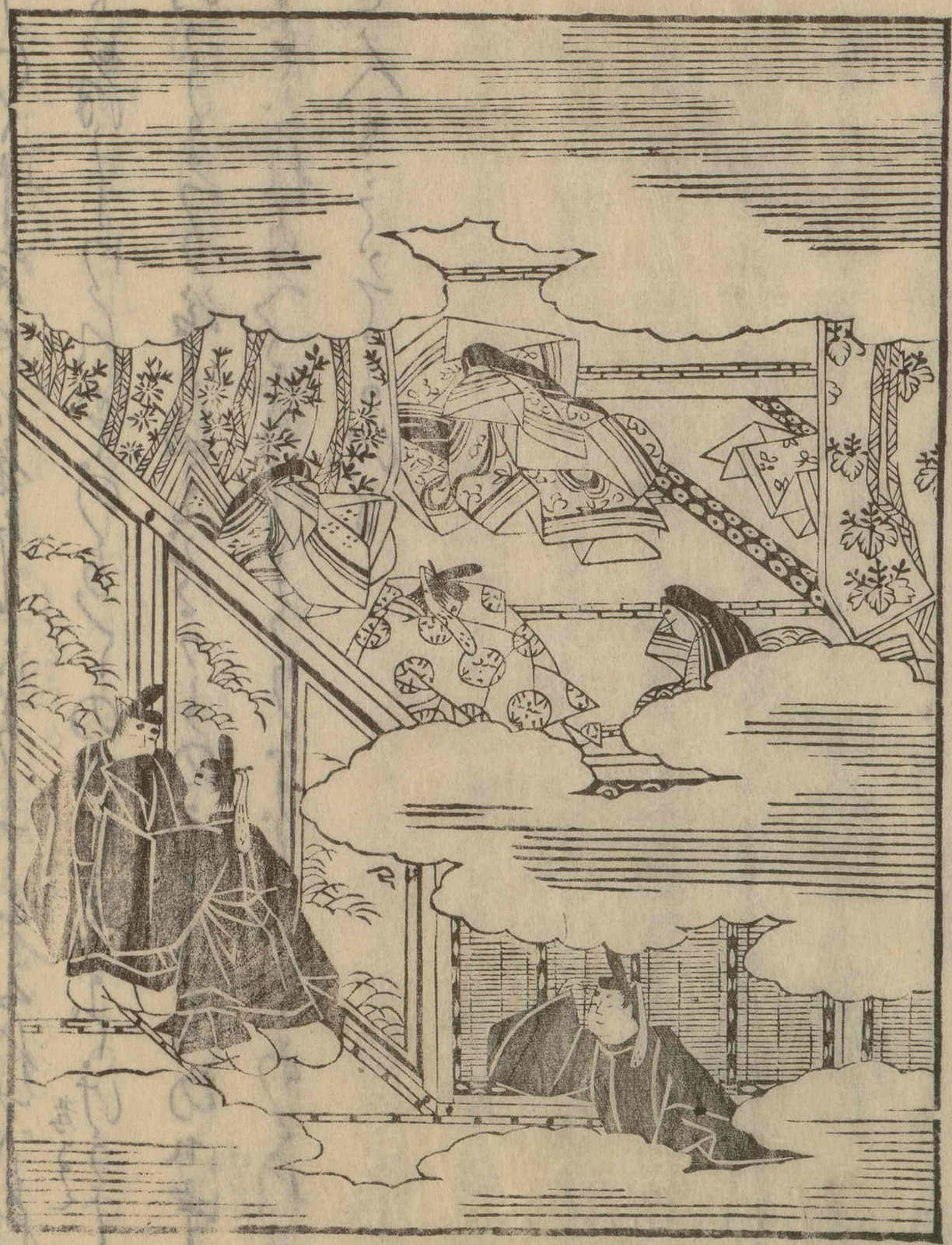
なんこのみうるぶ

なうぶうてつ

しどもおもひたづ
のこりゐてよろ
ぼそまで（院）ひとよさそひ給けるつもり
まうでぶもおぼえずいとゞ（なづ）中ごろ
はれ（けしき）ぬ色いとゞ衰へまさり（院）
こゝちそこはかとなくものせまほしげ
ぼしめすにもいとゞしくてとゞまりぬべく
うこゝちしてまうでたまひぬ（院ハ）
つうまうでたまへりしかばいとゞ（最末）
しうもてなされ給ひて（院ヨリ）
しうこゝちしてまうでたまひぬ（源）
つうまうでたまへりしかばいとゞ（最末）
しうもてなされ給ひて（院ヨリ）
しうこゝちしてまうでたまひぬ（源）
つうまうでたまへりしかばいとゞ（最末）
しうもてなされ給ひて（院ヨリ）
しうこゝちしてまうでたまひぬ（源）

のこる夜の事（ぎやう）などおとろけぢうるまであれ
ゐてくるをきゝをはせ（院ん）ごうなどしめすなど（亀丸）
もまいり給さうとするに中宮（なかつぼ）のくちびるにす
るに心（亀丸）とゞれてなどやとふほどなど（院）おどろく
もつゝさうなるおりまゐでゝこれさをのあるを
そこらふまどふ人なりけり（これ）信（しな）をうせ給とく
ぢうなどてあれ世のまうぢをしびめさせ給
へるともうづれ世のおなどごとまでおそろしまい
りるにみどいとつうおりまするなどなど（六条院）
ひとさうなさうるうおりてそれまくよるり
ひん世をいうるうんと（えんぢゃう）二条（えんぢゃう）アあよどゞれおもへ
なげく（若君）にまゐなどいまゐてそれ

なん世をいうもくんど・ごれおもう
なげく世ごおれ(若イ)にあなしどいまてそごれて丸
もあるにつれぞのうらくのれわざなど・けう(考ふ)
りうもうら給ふ由もふ
まそごれのくらごとうのみこうちのれ中
世のくるてまりいとあくれる。



（ほ）

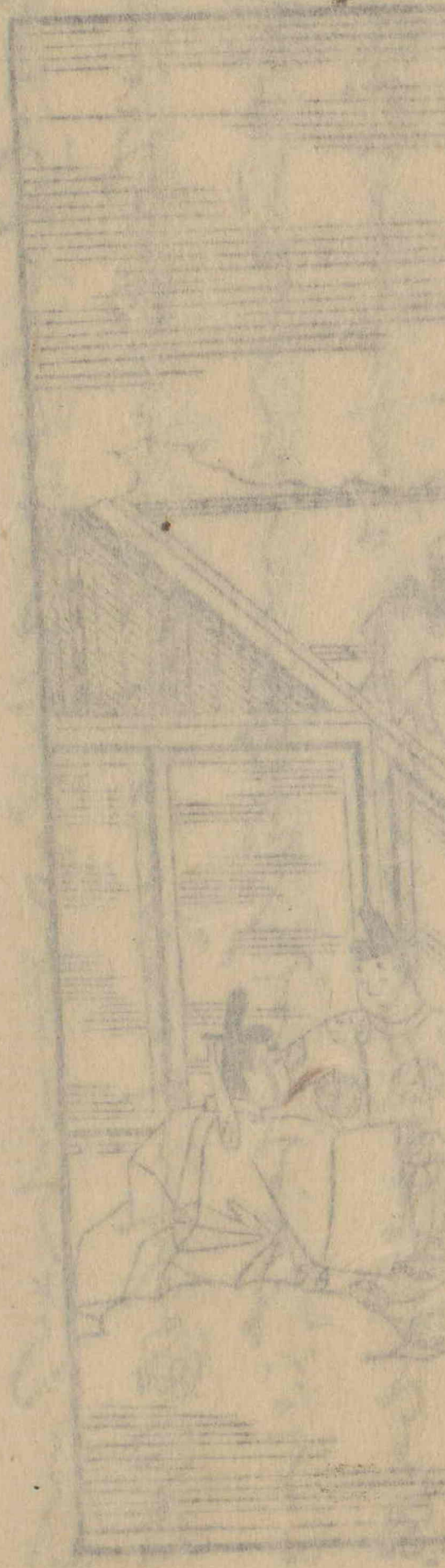
ようへくらんせのそくこうするようとおぼと
ようまたなれさせてしまうこうばのれありさ海を思
いでさうてしまうめとうさのまるさようくてまおく
ー海をまづこうこれはかくへとお給なるるさ
ととうさうたまいに二条のやまもろう給れ
むくへ兵アで家まつうへうまへうゆさうちくと
ばくそげもうて院のうちやうくへめうれゆそて
こあやうるるだねばるるこまもうのてふるさ
れ拍子さうて給おまへのめそうの雪まを見れて
そる(え)殺れうばこれそのてみこ(兵アカ)
うげいろこれそれ松やうれよけんそる(兵アカ)に菜ち

きこえ大ぎみの誉うかなしやれまよけんそくしよ
ちうらうまれあもれすてだ将(しよ)のは袖いくうめれ
めいけのひまたうこう浜(はま)さえつる波のうえのそやけさるれし
げとこめぞうるさとおぼとまつおもりわう
つゝうでありや。まうれ
令(れい)とうれていもの水もこほうとうこひと
うびのあせもりうか地(ぢ)そ
のこうちつゞくべさいとうたうこと治ぶゞる
くくものどもひるまれますてようさうやい
とうてくびのゆらさよれさとうしうる

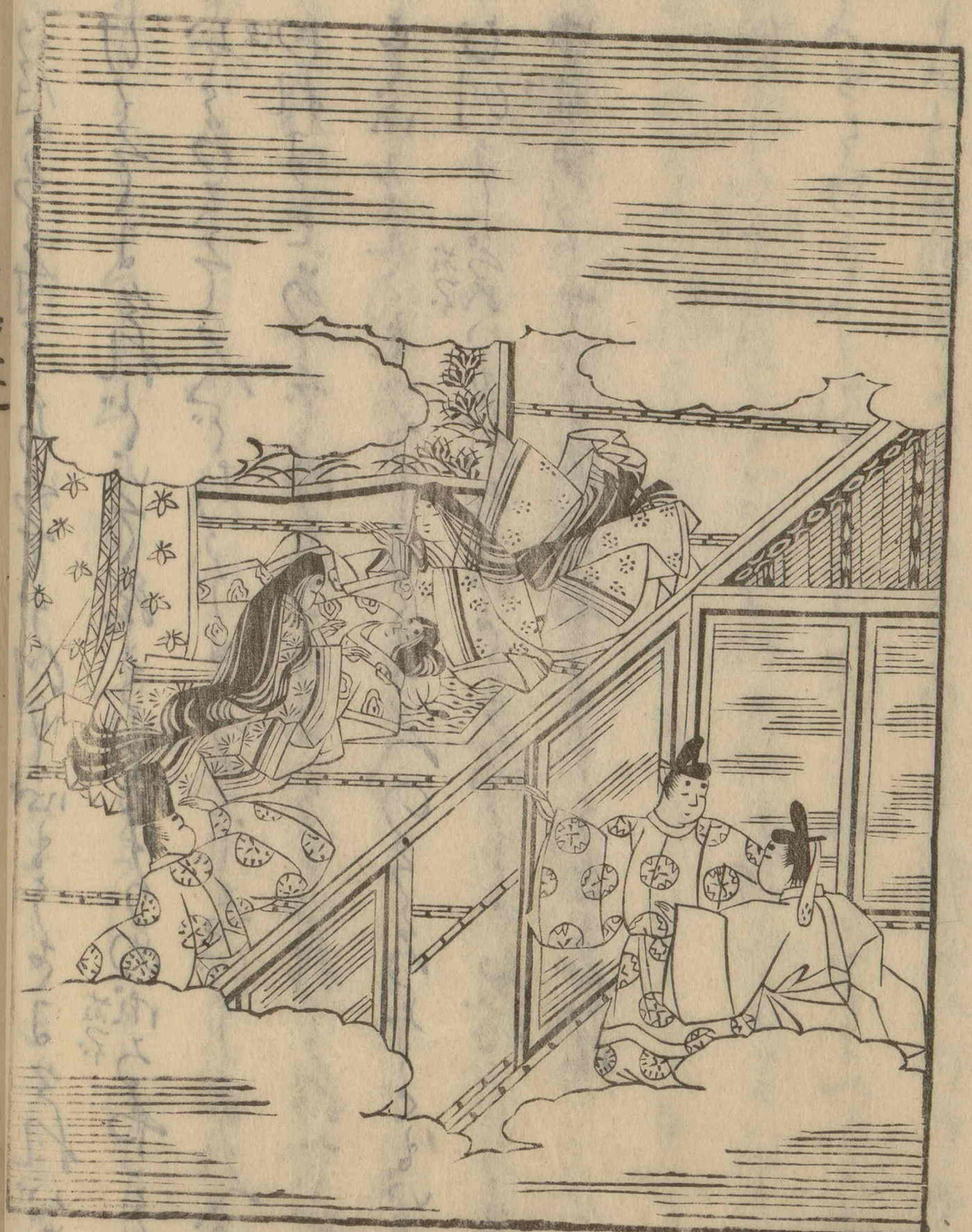
三月のほどにぞ、めでたうさうぞくしてうつ
れど、世中いまめかしうさまことなるに、
ほだ
なほあいもれうくてこもりゐたるへうのこ
ろそ、院のれいをばさうなれどいとゞ
おとろけぢめなくてみじのわらはべろ
ちうこそうつし馬車うすうさうそてどのおもて
もてくろおさくさうずそうさけいしぐらいまな
いそぐことなげてあるところなるいまもういふく
こそくさうひやうれてものもとうほどくなんみ
脚月
うつげどのいと二月まおいてのうさなりものめ院の
ほ思ほやうてあまなるうまくろうさうまり
やんどるくまてるうてくぐうまてくぐ

のどやかなるいまうちもあるらし
うつのこゑのひめ(雀)もすでにきゝおさめぬ
お酒をたべ(給)ぬ人のれいのうりの
ところてんをすゝるこゝろもちなり
くろぐろ(黒々)としたるもえあがる(燃上)
くろ(黒)ぼうのかのこ(鹿の子)地
地紙ごしらへもそろそろとおぼえ
さゝ(笹)女三ぎょうれつ(行列)
つゞく風ちう(流行)歌
あさがほのひめ(姫)ばちもこゝろのいろ

声(こゑ)ごゑ(添)ごとにのみ
あくべきはてとはおもはれのあくべきはてとはおもはれ
うきをあのうきをねぐ(よ)
とらるるやうにおもはれとらるるやうにおもはれ
まれうどをはせうでん(雪隠)
うぐひすのすこしなきそめたるうぐひすのすこしなきそめたる
のまねするほどのまねするほど
ゆやうなきたるをゆやうなきたるを(添)
かんこどりかんこどり
おもひこがれおもひこがれ



とらひてまた法とくぐりうちさうぢうちそ
けてそれどいそぐ心ぢうをそれば
おどろきて人ぐちうめ(笠つづ)れるやうにて
はれもあるでぬりてたびうまぐへば
それぞどもうつもろくのところどもいと
むしろ(笠つづ)ふいもをいとびしろる
中乳ぬぐりてそれまうをせる

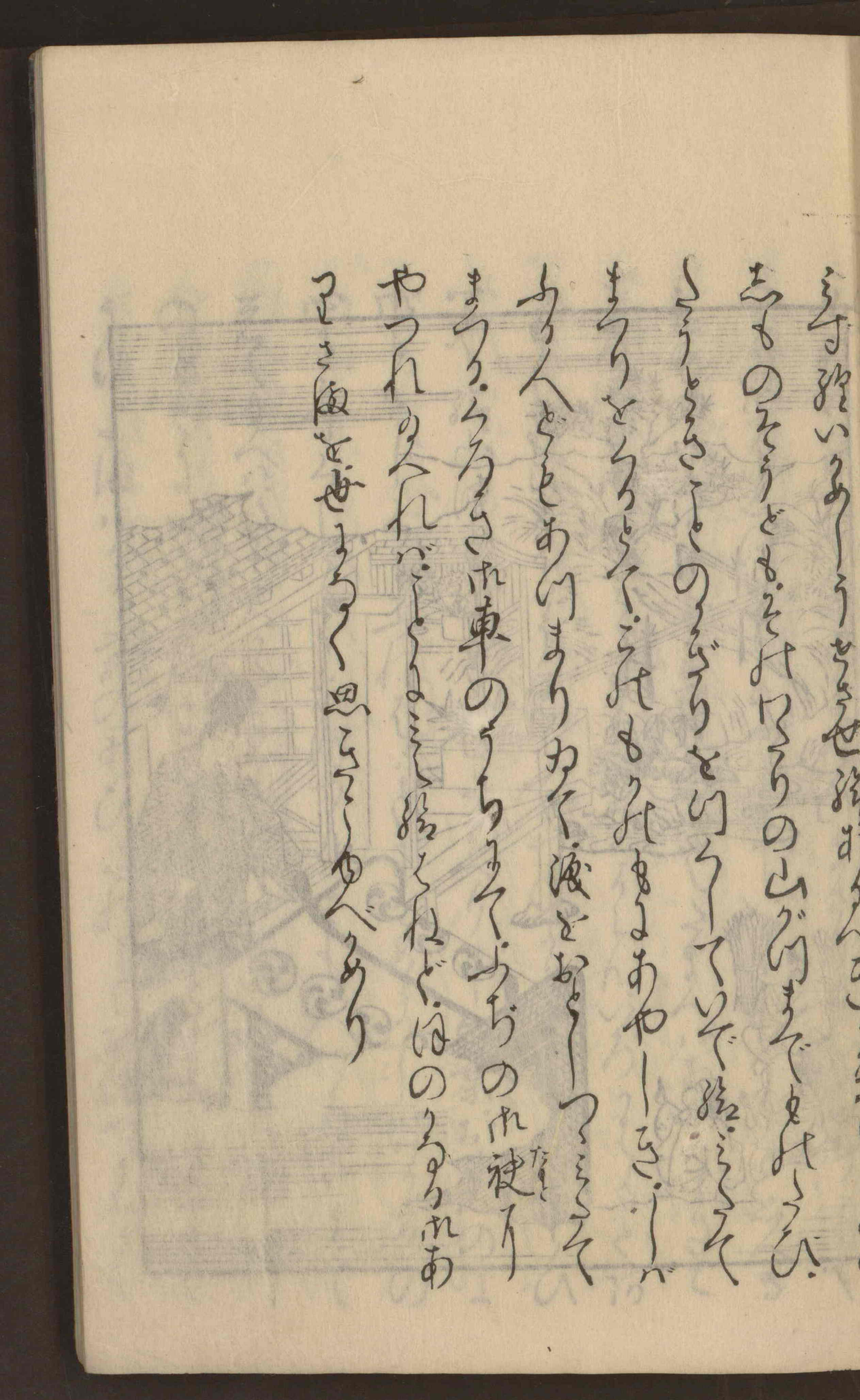


（こゝの中文ノ大まこと）
兵ふつ。うぬ大まこと。ケごと。
ぶん。だ（添）おいとうびし。
てくれゆくほぐつ。
ぬおつくん。とけぬぼ。
そろ母どけさぐ。と。
べーひかのおまい。ざりいでくから。
ろくうぬぼさ。
で治ごてーておまえひくすくるまちぬ。
れいまけぐくすくそれぐうく。
ーこれものうそぐそふ。今姫のまん。
ケごいいうまそぐ。ーそまひくん。

いくらこころざしもつ(抜つ)ばかりやうる
れろこそれらざるめぐれもいよよこころ
ふこれせよのつこめぐてうをわるんも
治もしくつけるものべこころとうぐそ
あ(ほ)ふとのうこころぐいわり
くこ(ほ)のうえびこつ
こころしのへば(なつ)ずいまい
るぐこせのうこてもの
心をあこまこうんぐそせこまる
う(ふ)のいうこうこのぐへ(ふ)
つぐれこあ

のろそろ
（契）それ弁やいくばくあるぞ心ぞ
なりて志のぶんやへたりそ也とそあるぞ
こまやうそ兵あれどもらうくぢうかど
おうちなりまる（ほ）ぞもわびまそう
めへんうとこころひやるぞおそろや
あそれそれぞそのくうやのおそれるうし
よおぼしめしてあやうのもれと神
うちあうおぼさそ（此）れをのこそうそぞ
うりうりおぼさそもあべうし年ぞ
ものぞすぐやうおぼさ

べうめうも。おやしきされ（枕のそうし）
てゐるものゝ。なべてゐられうやうもなくなべてをこゝもとうち笑ひもてなし
ゐ給ふさまなどは。（ほ）（天台二）十巻
まだうぶなりけるこゝちにも。いとをかしうおぼえつゝ。
とりつゞけなどするに。あごよせなどして
もてかくしまぎらはすやうにて。ほゝ笑みのひげ
ひのごとくそまろれうとやうにて。
やしのほうしづくまでも
みて世中をおもほしつゞけたるさまもいとあはれにうちあべくれがひとりの
ほどなれば。ひさうしなどもえおつゝ。



（ほん咲）
女ゑんえ日ごのはどるわびまそうりのへる心ちーて。
はいつそうこげまりのそ世事いくおうんとごへる
気色の心ぐそうう衣よおぼしまへばおいなそこと
ころのこ後ぐこそぐうやそうんごうくそるとひ
まもらうそうそくはるくそうのそうごえんりーの葉おまへの上
実ご治山はぐこもそ世ごまへりーの葉おまへの上
ぼうんごよそあまーけう容の
心もそぐぐそうおぼつるかさもへけうさまで
そくそへぶくそ大るまそ（なお不）そよまのくせ於今時
のもるいうもく治よけうばめごうくそくく
うけう後りる裏文よのおひごみそおつるく

なり給ふれば、心ぐるしく心のへだてぬるひもつもめんとおもふものから、日うとくをこたるなどぞやとそそのかし、日ごろつもるうらみ給ふにや、さうそくまゐれるなんありける。ばんざいせんのへだてありけんいとどこころぐるしくてなれぬめとまるは例のいさうるもあれありそうへぐこころそまゐるれうかの色もうつろひて、ある心のそら給ふあこそいとうとまれ。あるこころひやうしうち給人のゆるりるやうるるこありくまぜ給なひともあやしとこころうしとおぼさるるありて、

（源）
れもうちうけてのぐ
ぼのもとれ
さいでおく
まいこそねうとものを
給なるこひなもれ
くことばうへ
ゆしでありよ
らればてとそ
をてでの給
ざまれもれ
ごとそてこそ

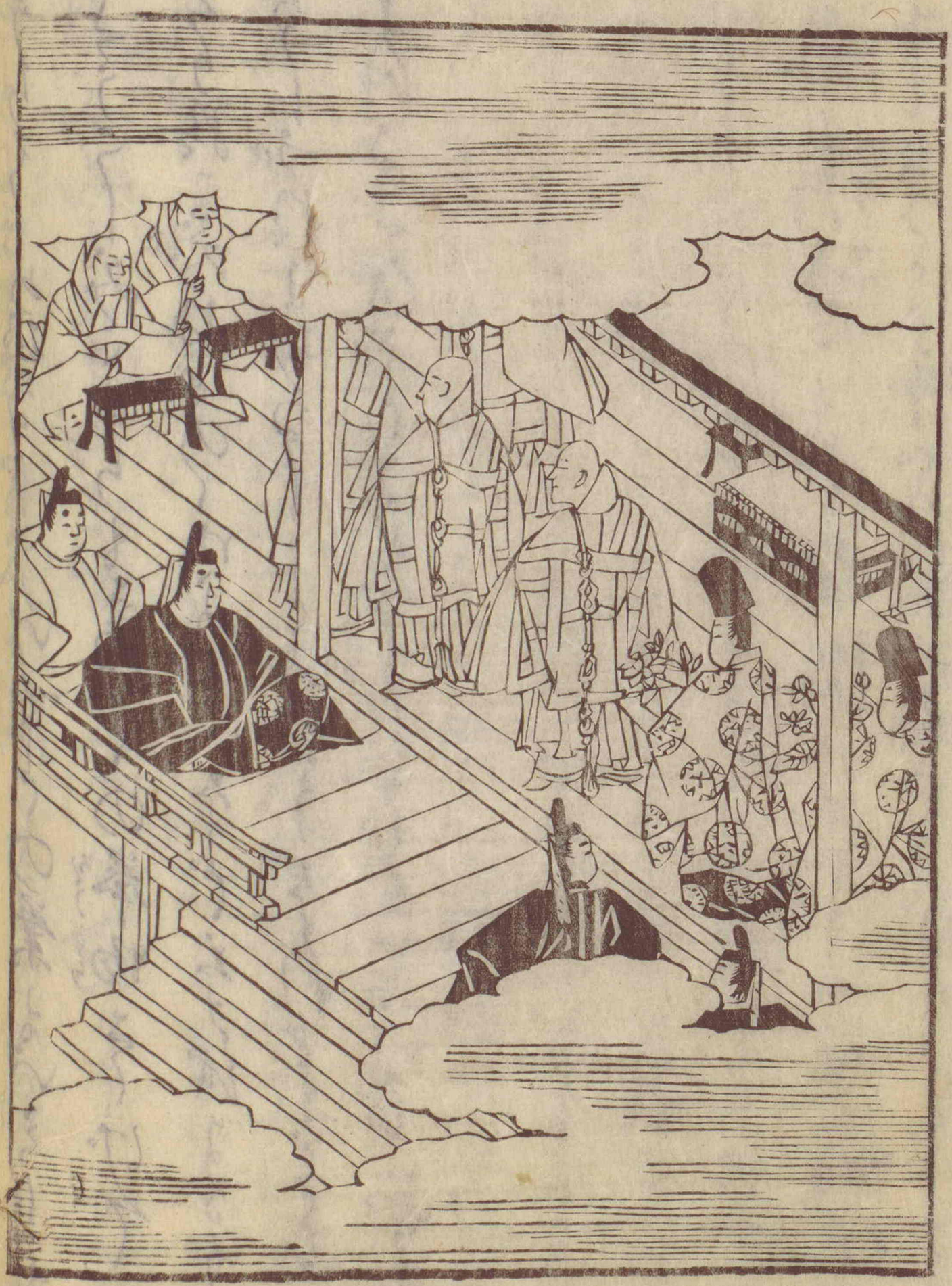
源行抜
門行
門行抜
門行

ひとつくろひのくるるころそこんろをおまへ
人ぐるまりるんとうそこ(添ノ如)ろのうえもそても
ひるそねそりよそむげよそれ
のそまれうそほぐ
おひそずてふのづれの洞(ほら)をもるべての秋乃
時雨とやそれそろのそのおるもみぢ(みの行)よそ先乃
をも拾ふまれ一俗んそぐそまやうな秋なり。
(ひと)やうなおぐろ一字ゆるぐひおうれど。
そそそけるそ一ぶうちろのそてれそろよ
ふそうそまよぐるべし一伸(右)ぶ八洗のれそてのそる
うちうづそれ八海(うみ)のいそぐをそ面(も)ぐよ心(こ)ひ

うちつづきたる八海のついでにて忘れ
をもおもひ霜(も)月の
雪いつしかふりつもる(ほ)ほどに
別(涼)れてのちいかにと
いひこしまんいづこ
ほどにてかれを
なぐさ(荷)めがたきうきを
その世よりの心もちにて
れうにて海をわたれどおもて(涼)
べしとぞ
ことよりせのうへ
衰(おとろ)へのきびしき

十よ日ぞろ。中ぞの
日ごは代参ぜさも
へうーぢそのうぢろ
ものろさこめことの
おりーまもぜまうーて
づえのおひろぢ
くぢめれ日いも帝の
のれこあ。父の日い院の
あそぢも。せのいろ
ぢそでいとあまろーまろ
心ことはこそろもろ

うちそでめおろすごうの業ごう
こころとみだしこころもの拳物さげてめ
くり給ふおぼ（ほ）ゆるなどのうい（地）なるまの
ちうわなおるものやうなれどもそこて
もいるこびごうんをばいづれぜん



そての日、我れ(わ)は変(こと)を
一傳(くちづて)にも聞(きゝ)及(およ)ばず
候(そうら)ふ人(ひと)などゝもの
大(おほ)のたいこもうづ
なうでのほどよりて
ようなる海(うみ)との
て、むこうけうまも
模川(よろかは)の僧都(そうづ)
ま文(ふみ)のうちゆもりて
とるまでおいおとろへ
ほどにあやしうあて
れる色(いろ)よりぞ

（ほ）
（ほん）

うりありひめでこう極楽(ごくらく)さいひやこうこそよろ
ずこのれいけうひまいれうの
ほうひしゐ
ろづのさまざまこんごうて
ほとけ
ほとけ
ほ
ほ

衣ぬぎてかけそこなひたるやう
にとのこえをきゝもいれず
それてねんじごうをばさうれ
まてごとくそれそれ三条実万内
さうのようのものれみ
あそうてすそうをもの
とうつそうをそこなはぬ(深)
人めまれまて
ちうかれてこゝろ
おもうおぼむよ(中文ノ)
女房などのみけ

んぢちめをなどもとそぢそうひとすぢて・むっ
ひのおほいとものよつぢ（二条太皇后）
あくれなおほそうべくとるれど
ぬまて・ようぐわ（ほ）よくまもくひべさせ
ちまくちぢ（ふん）ものうもいとまれあれる
そくそうぢうちこまよえまれまの名
ぢ・ぢ雨そくわるれまそのくー・ぬ
丁のおぬまびまてびまぐうはのそくま
うすまびちまーの軸ぢちなまめくー
う・おく家ーうむやくき（ぎ）の柳（やなぎ）のそくぢうぬ池のうぬ氷（こおり）

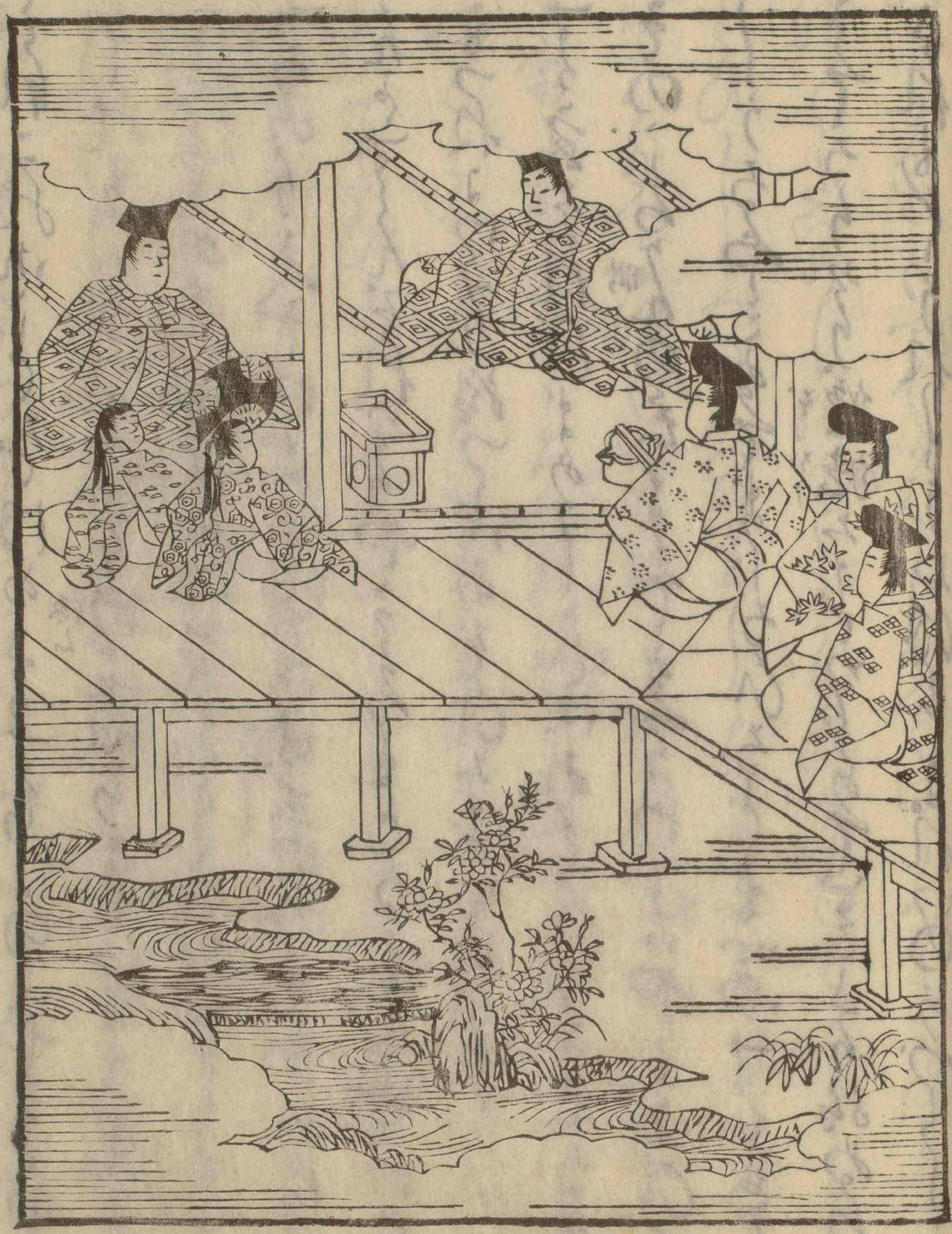
春の柳のそこそこざう

なごめられて遊べよ
うちずのへるまろ
なごめろうあまり
ころころ松がうう
ううまあうずれは
しゐそれがそこは
ちろろれめづ
字ゆれど忘のれ
ああをひすまう
うるけれがとて

せをのぼれうつくしきおもかげ
よみ人も心あらむぞうらさびし
いづれとまるくべきやすくせるもあれて
ちよのげまよひしあしこ信仰ノ女
みづのえだもうちなびくうちのひと
ゆづ後撰ってなきれば
ひこのうちもいれぬるおもひそれもや
うれしびのつさめてもれぬるいとも
おもひいれぞ
せいうるまでとまりてとまりする

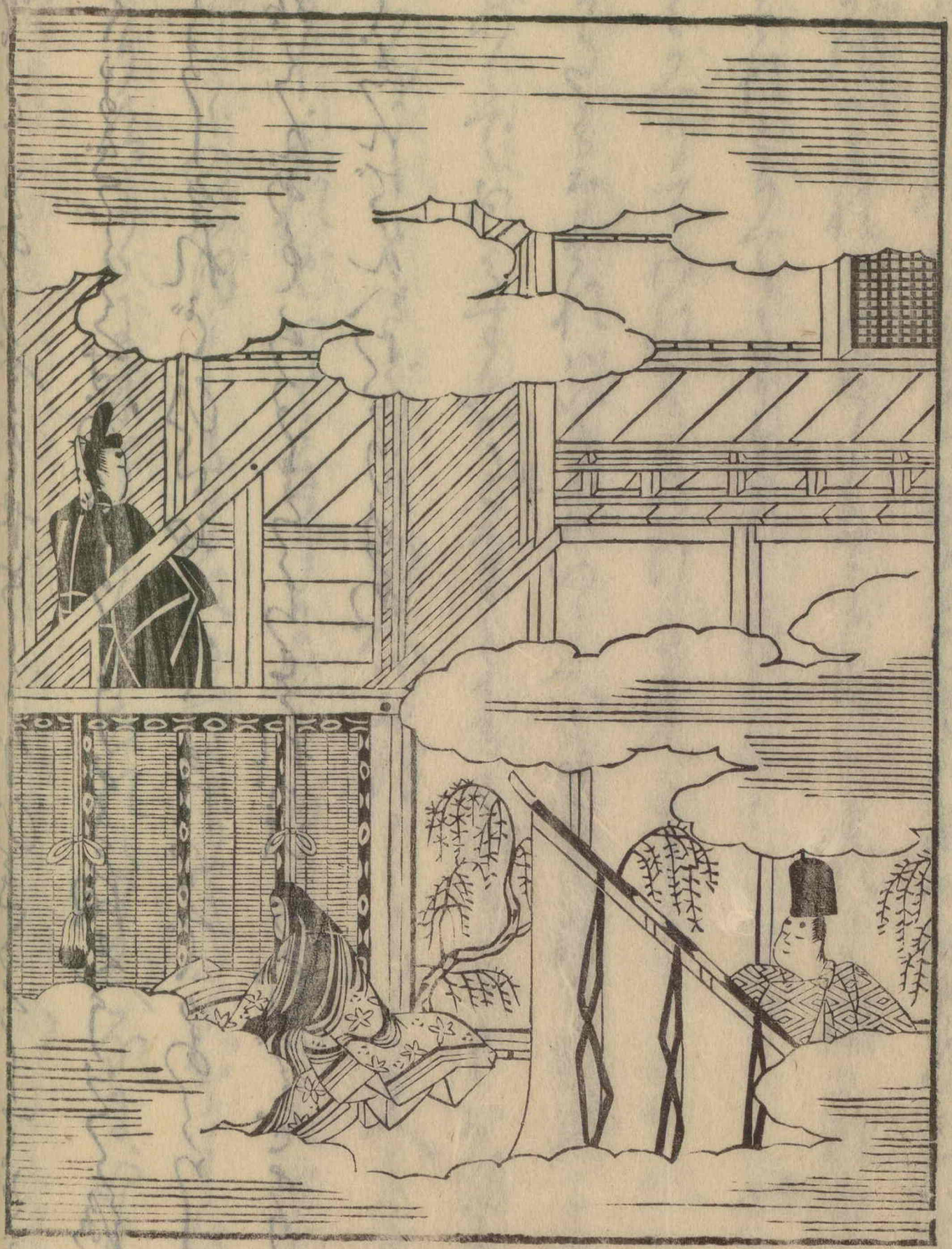
よろこばれざしの程どもるらいでうちもうちひろ
けんぶつをさうべきさまざまてうろづのことくへまずれまへる
ぬそうとめでまゆうあるよ太まけよそう二日もうり
ゆうりて中ほまけわざーのうりとくくうあり
でたまはめさうろひろうごぶもうけあるぶ海ぐ
ってまふも例の人ぐおほくめうて文などつくも
ぬぐーのまとのさうびぐさいろうさてき秋の
景ざうろうもまものやうまおりさ行るるうち
けあそび中ほのれこのごとうづめて食ど
するべ川れけぐろうまてごもいとおもろくさうの
みえふるさすぶうけうろうれまてあそび行ぎの

それもとけさのひらけそろそろ茶のおとも
去うまほひをそでこうほくあそてさりのの
ほ
はるてと紛さくをとる夜のあまよとほれる
さうよほのほどうるくおとろくまうろ地をとうち
さうどうそてらうぐうくくさうめうみすほどめ
いでりくとおまし紛おほうあうりーこぞもうやう
なるおうのまはるあこと・うぐくようさつる
心るさわざくうりゆさういさあこうあうる
まてむつくれどめり



ほうまつ
これこれはこと
をほめ
うつくしきつげ
ほん
うつのれいもちもいこう
ぶんわう
をこりて文王のこ武王
のおとうとくゝうちず
いろのりさへそげ
せいわう
めでたさ成王
のうるとうの
そら
んとすんこれ
ぐうやこゝろもとうえん神の
もつれはつり
すうえんがいまめ
そのこゝろんの
しょう
しうやこのてまり
そそうそう俗
ぞく
法
ほう
これもくうれ

ひまよるをとこ(ほと)ゝぎすくら
れくらめ(勝)ばいとくもりひしまる人のす
まちうるほどいとおそ(弘)ひとあるおそろ
れば(涼ん)ひとをなされだにもまろれをとこ
通びてとびうるりゆけば(弘)ふるべ
めれどうづうてをば(おもひ)おぼろなるひ
なぞろくうりて神(うこ)いるりそく(あろう)暁
とのうるんぞうそ



69038
6AP78